

研究紀要 662

令和3年度
研究紀要

児童生徒の不登校対策に関する研究

令和4年1月

盛岡市教育研究所

《研究の概要》

不登校児童生徒（長期欠席生徒）が、増加の一途をたどっている。多くの児童生徒が毎日楽しく充実感を感じながら学校生活を送る一方で、登校できない児童生徒が増え続けている。家庭の貧困や児童虐待、情報機器の普及拡大等、子どもたちを取り巻く環境も大きく変化しており、不登校の原因や態様は様々である。いくつかの要因が複合したものや、明確な原因が見当たらないといった事案もあり、求められる対応も多様である。また、長期化すると、学習の遅れや将来への不安が子どもや保護者に重くのしかかり、悩みは更に深刻となっていく。

市教育委員会では、不登校対策支援員の配置、適応指導教室「ひろばモリーオ」青山教室・仙北教室の設置、教育相談室での相談対応等の対策を実施している。各校では校内体制を組織し、関係機関との連携も図りながら、粘り強く対応をすすめている。一朝一夕に解決しないことも少なくないが、成果をあげている効果的事例も見受けられる。

そのような各校の効果的な取組事例を収集し、整理することを通して、学校のよりよい対応に向けて参考となる資料を作成し、不登校対応の充実に資するため、本主題を設定した。

1 調査期間

令和3年7月～9月30日（木）

2 調査対象

市内42小学校 及び 市内22中学校における

「不登校への効果的取組事例」各校一事例（令和2年度末～3年度）

3 調査方法

各校が、不登校への対応で効果のみられた事例（一事例）について様式に沿ってまとめ、研究所でそれを集約・整理する。

4 調査結果の概要

報告された事例を、〔居場所・絆づくり〕〔自己有用感〕〔早期発見対応〕〔校内組織〕〔相談活動〕〔学習支援〕〔進路指導〕〔スモールステップ〕〔部活動〕〔保護者対応〕〔関係機関〕〔モリーオ〕〔特別支援〕の視点から分類整理した。

その結果、〔校内組織〕〔保護者対応〕〔居場所・絆づくり〕〔担任〕に関連する事例が多くみられた。このことから、保護者との連携、組織的な対応、居場所づくりが不登校への取組として重要であること、窓口として担任が大きな役割を果たしていることの具体が明らかになった。続いて〔学習指導〕〔関係機関〕の関わりが大きい。

小学校では、〔特別支援〕に関わる事例が多いことが特徴で、特別支援学級への措置替え、通級、一時的な居場所とする等により個に応じた支援が行われている。中学校では、〔進路指導〕に関わる事例が見られる。卒業後の進路に対する意識が高まる2年生の後半から3年生のタイミングを捉えた指導により効果を挙げた事例が多くみられた。効果のあった取組事例の分析から、各校の実践に役立つ多くの示唆が得られた。

キーワード

不登校 保護者 居場所 校内組織 学習指導 スモールステップ 自己有用感

目 次

I	調査の概要	1～2
1	調査の主題	1
2	調査の趣旨	1
3	調査の内容	1
4	年間計画	2
5	収集事例について	2
II	分類と整理	3～24
1	小中学校（全事例）	3
	（1）事例の概要	3
	（2）特徴の一覧	4
2	小学校	5
	（1）事例の概要	5
	（2）特徴の一覧	6
	（3）特徴毎の整理	7
	（4）事例（学校毎）の考察とまとめ	14
3	中学校	16
	（1）事例の概要	16
	（2）特徴の一覧	17
	（3）特徴毎の整理	18
	（4）事例（学校毎）の考察とまとめ	25
III	考察	27～37
	ア 組織的対応（校内）	27
	イ 保護者	28
	ウ 担任	29
	エ 居場所・絆づくり	30
	オ 学習支援	31
	カ SC／SSW／不登校対策相談員	32
	キ スモールステップ	33
	ク 関係機関	34
	ケ 進路指導	35
	コ ひろばモリーオ	36
	サ 自己有用感	37
	シ 特別支援教育	38
	ス 未然防止・早期発見対応	39
IV	まとめ	40
	おわりに	41
	参考文献	41

I 調査の概要

児童生徒の不登校対策に関する研究

盛岡市教育研究所

1 調査研究の主題

「児童生徒の不登校対策に関する研究」

2 調査研究の趣旨

不登校児童生徒（長期欠席生徒）が、増加の一途をたどっている。多くの児童生徒が毎日楽しく充実感を感じながら学校生活を送る一方で、学校に適応できず、登校が困難となる児童生徒が増え続けている。家庭の貧困や児童虐待、情報機器の普及拡大等、子どもたちを取り巻く環境も大きく変化しており、不登校の原因や態様は様々である。いくつかの要因が複合したものや、明確な原因が見当たらないといった事案もあり、求められる対応も多様である。また、長期化すると、学習の遅れや将来への不安が子どもや保護者に重くのしかかり、悩みは更に深刻となっていく。

市教育委員会では、不登校対策相談員を各校に配置により支援体制を強化する他、登校できない児童生徒の居場所としての適応指導教室「ひろばモリーオ」青山教室・仙北教室を開設したり、教育相談室での相談対応を行ったりする等の対策を実施している。各校では校内体制を組織し、関係機関との連携も図りながら、粘り強く対応をすすめている。一朝一夕に解決しないことも少なくないが、成果をあげている効果的事例も見受けられる。

そのような各校の効果的な取組事例を収集し、整理することを通して、学校のよりよい対応に向けて参考となる資料を作成し、不登校対応の充実に資するため、本主題を設定した。

3 調査研究の内容

（1）学校を訪問しての現状把握と、未然防止・自立に向けた多様な方策についての情報収集

① 各中学校を訪問し、不登校や学校の対応方針、登校しぶりや、長欠報告に至る前に改善が図られた事例、不登校から自立に向けて効果のみられた事例等について聴取し、状況を把握。（5～6月）

② 市内の各小中学校から、効果的取組事例（未然防止、回復）の収集と整理する。

① ②を系統的に整理し、研究紀要にまとめる。（9～10月）

（2）児童生徒が不登校に至る背景や要因の分析…別途各校に通知

① 令和2年度に実施した自己有用感アンケートを小学5・6年生、中学2・3年生を対象に継続実施し、自己有用感の状況について市全体、学校別、学級別の分析結果、支援が必要と思われる児童生徒（学級名・出席番号）をリストアップして当該校に情報提供を行う。（6月調査、7～8月分析）

② 自己有用感アンケートの分析結果と、不登校の発生状況や各事例の追跡により成果と課題を整理する。（1月～3月）

（3）文献研究

参考として関係する文献や著作物等、他県の実践事例等を調査する。

（4）研究成果の普及

研究について紀要にまとめ、研究発表大会で発表すると共に、市内各校に配布する。

4 年間計画

4 月	研究構想，年間計画立案	中学校訪問による情報収集
5 月	自己有用感アンケート調査依頼	
6 月	自己有用感アンケート回答結果の回収と分析	
7 月		効果的な取組事例調査依頼
8 月	自己有用感アンケート結果各校通知	
9 月		学校訪問による情報・効果的な取組事例のまとめ
10 月		
11 月	研究紀要作成	
12 月	研究紀要完成・研究発表準備	
1 月	研究発表会 事例経過と自己有用感アンケート結果による研究の整理	
2 月	研究から明らかになった顕著な事例等をリーフレットにまとめ各校に情報提供	
3 月	年度末反省・次年度計画	

5 効果的な取組み事例の収集について

各校から不登校への対応で効果のみられた《効果的事例》について，一事例の提供を依頼する。

提出締切 令和3年9月30日（木）

○《効果的事例》とは

- ・ 不登校を生じさせない，未然防止対策
- ・ 不登校の早期発見，早期解決に向けた校内体制
- ・ 不登校児童生徒の自立に向けた支援体制
- ・ 不登校児童生徒への個別の対応
- ・ 不登校児童生徒の保護者への対応や保護者と連携した取組
- ・ 不登校児童生徒の改善に向けて関係機関と連携した対応 等

※ 登校しぶりの状態から，取組により長期欠席報告に至らずに済んでいる等，少しでも改善が見られた事例も対象とする。

※ 不登校児童生徒が不在の学校にあっては，未然防止につながっている取組を記載する。

○対象とする期間

- ・ 令和3年度に取り組み，効果がみられた（効果がみられつつある）事例
- ・ 令和2年度に取り組み，令和3年度の進学・進級で改善がみられた事例

個人が特定されることのないように情報の取扱い，記載内容には十分注意する。

Ⅱ 分類と整理

不登校への効果的な取組事例 分類と整理 1 小中学校 (1)事例の概要

No.	校種	学級数	概 要	注目
1	小	LL	家庭への継続的な関わりやモリーオとの連携	◎
2	小	LL	児童の「困り感」※に寄り添った支援や居場所作り	◎
3	小	LL	寄り添いながら登校意欲の回復を根気強く待つ	
4	小	LL	診断を受け情緒学級で個に応じた支援で改善した4年間の取組	
5	小	LL	関係機関と連携しながら、保護者とつながり続ける	◎
6	小	LL	S C面談や不登校にかかわる個別面談会での助言をもとに改善	
7	小	LL	関係機関と連携し、段階的な居場所作りで自己有用感を高める	◎
8	小	LL	教育相談と記録の積み重ねにより医療につないで改善	◎
9	小	LL	家庭の困り感を共有しながら、特別支援教室に居場所を作り教室へ	
10	小	L	保護者と情報共有し同一姿勢で支援	
11	小	L	組織的対応と信頼関係の構築	◎
12	小	L	総合的視点からの児童理解によるチームアプローチ	◎
13	小	L	ケース会議で無理のない目標設定による安心感	
14	小	L	特別支援学級との連携により学級でも学習	
15	小	L	相談活動と個別対応で居場所を作る	
16	小	M	母親との信頼関係構築と支援	◎
17	小	M	福祉、児相、病院と連携し、母子への支援を継続	
18	小	M	ノート交換で信頼関係づくり、保健室を経て教室へ	
19	小	M	担任の継続的な関わりと進路指導	
20	小	M	組織的対応により別室登校につなげ不登校を防ぐ	◎
21	小	M	生徒理解に基づく対応と、母親との20回のS C面談	◎
22	小	M	自己決定により負担を軽減し、登校しぶりを克服	◎
23	小	M	学校、保護者、関係機関の連携で不登校を解消	
24	小	M	生徒指導委員会で共通確認し、組織的に対応	
25	小	M	担任の継続した関わりにより改善傾向	
26	小	M	学習支援と保護者への相談活動で改善	
27	小	M	支援委員会で方針を確認し、担任が児童保護者に対応	
28	小	S	毎月のアンケートにより早期発見 未然防止	
29	小	S	母親への連携した対応	
30	小	S	日頃から学校で取り組んでいる未然防止策	
31	小	S	個別支援委員会の方針による担任の対応で未然防止	◎
32	小	S	特別支援学級の週1回の情報交換を生かし、組織的に取り組む	
33	小	S	個に応じた学習支援と保護者への継続的な関わり	
34	小	S	いじめアンケート、ソーシャルスキルトレーニングで未然防止	
35	小	S	学習支援や保護者との連携により改善	
36	小	S	子どもに合った居場所を作り個別に対応	◎
37	小	S	保護者の理解を得ながら保健室の支援	
38	小	S	個に応じた学習支援や居場所作り	
39	小	SS	入学への不安を抱える児童に寄り添い未然防止	
40	小	SS	困り感を理解した個別対応で長欠を防止	
41	小	SS	自尊感情を高めることに主眼を置いた支援	
42	小	SS	保護者との信頼関係を構築し支援	◎
1	中	LL	スモールステップ表を活用した学習室での支援	
2	中	LL	相談担当を中心にSC、SSW、担任、学年が連携	◎
3	中	LL	担任を中心に組織的な支援で自己有用感を高める	◎
4	中	LL	相談室での学習を経て進級時に教室復帰	
5	中	LL	SSW・教育相談担当が両親と面談し教室へ	◎
6	中	L	3年生進級のタイミングを捉えて進路指導	
7	中	L	担任、SSW、医療機関の連携により再登校	
8	中	M	「相談室」「特別活動室」複数の学習の場を設置	◎
9	中	M	担任を中心として、組織体制で存在感・居場所づくり	◎
10	中	M	少人数学習支援室、個別学習支援室で安心と学習を保障	◎
11	中	M	連携して保護者に寄り添う支援	
12	中	M	別室で居場所と学習を保障し教室復帰	◎
13	中	S	自己決定を尊重し、学習支援により登校を継続	
14	中	S	家庭、本人、モリーオとの継続的な関わりから学習指導へ	
15	中	S	担任の生徒、保護者への関わりで別室登校から教室へ	
16	中	S	別室登校を継続しつつ高校個別見学で進路意識を高めた	◎
17	中	S	進路意識の高まりと文化祭で学級の意識を高めて相乗効果	
18	中	S	担任が支援、学年主任の面談で自分を見つめさせる	
19	中	S	保護者との信頼関係をテコに回復へ	
20	中	S	学習支援室での個別学習で登校継続	◎
21	中	SS	スマホ依存の生徒への保護者を含めた組織的な対応	
22	中	SS	保護者との連絡を密に保健室登校で個別指導	

学級数 SS:1~5 S:6~10 M:11~15 L:16~20 LL:21学級以上(特支を含む)

※「困り感」の用語は、学研の登録商標です。

(2) 特徴の一覧

■ 特に中心となる取組み ■ 関連する取組み

No.	学級数	未然防止	居場所 絆	自己 有用感	早 発見	校 内 組 織	相 談 活 動	学 習 支 援	進 路	スモール ステップ	部 活 動	保護者 対 応	関 係 機 関	モ ー タ リ オ ー	特 別 支 援
1	LL						■					■		■	
2	LL		■			■		■				■			
3	LL		■					■		■		■			
4	LL		■	■				■							■
5	LL											■	■		
6	LL						■					■	■		
7	LL		■	■						■			■	■	
8	LL					■	■					■			
9	LL		■			■						■			■
10	L					■						■	■		
11	L		■			■						■			
12	L	■	■			■									■
13	L					■		■				■	■		■
14	L		■			■	■								■
15	L		■			■	■	■							
16	M		■				■					■	■		
17	M					■		■				■	■		■
18	M		■							■		■			
19	M							■	■			■		■	
20	M	■	■			■	■					■	■		
21	M		■									■			
22	M	■				■				■			■		
23	M					■						■	■		
24	M				■	■						■			■
25	M		■	■		■						■			
26	M						■	■				■			
27	M					■		■							■
28	S	■			■	■									
29	S		■			■						■	■		
30	S	■			■	■						■			
31	S	■	■		■	■						■			
32	S		■			■						■			■
33	S	■	■					■				■			
34	S	■			■	■									
35	S		■			■		■		■		■			
36	S		■			■		■							
37	S		■					■				■			
38	S		■			■	■	■				■			
39	SS	■				■		■				■			
40	SS		■			■	■					■			
41	SS			■		■				■		■	■		■
42	SS		■			■				■		■			
1	LL					■		■		■					
2	LL					■				■		■	■		
3	LL		■	■		■		■				■			
4	LL		■			■		■							
5	LL					■	■					■		■	
6	L		■						■			■			
7	L					■		■				■	■		
8	M		■			■		■		■		■			
9	M		■	■		■	■	■		■					
10	M		■			■	■	■							
11	M					■						■	■		
12	M	■	■			■		■				■			
13	S					■		■		■					
14	S							■	■	■		■		■	
15	S		■				■				■	■			
16	S		■	■					■						
17	S		■			■				■					
18	S			■		■	■		■						
19	S		■		■	■	■				■	■			
20	S		■					■							
21	SS		■			■		■				■			
22	SS		■			■			■				■		
該 件 数	小	9	24	4	5	29	10	15	1	7	0	31	12	3	10
	中	1	14	4	1	17	6	12	5	7	2	11	4	2	0
	計	10	38	8	6	46	16	27	6	14	2	42	16	5	10

不登校への効果的な取組事例 分類と整理 2 小学校 (1)事例の概要

No.	校種	学級数	概 要	注目
1	小	LL	家庭への継続的な関わりやモリーオとの連携	◎
2	小	LL	児童の困り感に寄り添った支援や居場所作り	◎
3	小	LL	寄り添いながら登校意欲の回復を根気強く待つ	
4	小	LL	診断を受け情緒学級で個に応じた支援で改善した4年間の取組	
5	小	LL	関係機関と連携しながら、保護者とつながり続ける	◎
6	小	LL	SC面談や不登校にかかわる個別面談会での助言をもとに改善	
7	小	LL	関係機関と連携し、段階的な居場所作りで自己有用感を高める	◎
8	小	LL	教育相談と記録の積み重ねにより医療につないで改善	◎
9	小	LL	家庭の困り感を共有しながら、特別支援教室に居場所を作り教室へ	
10	小	L	保護者と情報共有し同一姿勢で支援	
11	小	L	組織的対応と信頼関係の構築	◎
12	小	L	総合的視点からの児童理解によるチームアプローチ	◎
13	小	L	ケース会議で無理のない目標設定による安心感	
14	小	L	特別支援学級との連携により学級でも学習	
15	小	L	相談活動と個別対応で居場所を作る	
16	小	M	母親との信頼関係構築と支援	◎
17	小	M	福祉、児相、病院と連携し、母子への支援を継続	
18	小	M	ノート交換で信頼関係づくり、保健室を経て教室へ	
19	小	M	担任の継続的な関わりと進路指導	
20	小	M	組織的対応により別室登校につなげ不登校を防ぐ	◎
21	小	M	生徒理解に基づく対応と、母親との20回のSC面談	◎
22	小	M	自己決定により負担を軽減し、登校しぶりを克服	◎
23	小	M	学校、保護者、関係機関の連携で不登校を解消	
24	小	M	生徒指導委員会で共通確認し、組織的に対応	
25	小	M	担任の継続した関わりにより改善傾向	
26	小	M	学習支援と保護者への相談活動で改善	
27	小	M	支援委員会で方針を確認し、担任が児童保護者に対応	
28	小	S	毎月のアンケートにより早期発見 未然防止	
29	小	S	母親への連携した対応	
30	小	S	日頃から学校で取り組んでいる未然防止策	
31	小	S	個別支援委員会の方針による担任の対応で未然防止	◎
32	小	S	特別支援学級の週1回の情報交換を生かし、組織的に取り組む	
33	小	S	個に応じた学習支援と保護者への継続的な関わり	
34	小	S	いじめアンケート、ソーシャルスキルトレーニングで未然防止	
35	小	S	学習支援や保護者との連携により改善	
36	小	S	子どもに合った居場所を作り個別に対応	◎
37	小	S	保護者の理解を得ながら保健室の支援	
38	小	S	個に応じた学習支援や居場所作り	
39	小	SS	入学への不安を抱える児童に寄り添い未然防止	
40	小	SS	困り感を理解した個別対応で長欠を防止	
41	小	SS	自尊感情を高めることに主眼を置いた支援	
42	小	SS	保護者との信頼関係を構築し支援	◎
学級数 SS:1~5 S:6~10 M:11~15 L:16~20 LL:21学級以上(特支を含む)				

(2) 特徴の一覧 小学校

■ 特に中心となる取組み

■ 関連する取組み

No.	学級数	未然 防止	居場所 絆	自己 有用感	早期 発見	校内 組織	相談 活動	学習 支援	進路	スモール ステップ	部 活動	保護者 対応	関係 機関	モ ー タ	特別 支援
1	LL						■					■		■	
2	LL		■			■		■				■			
3	LL		■					■		■		■			
4	LL		■	■				■							■
5	LL											■	■		
6	LL						■					■	■		
7	LL		■	■						■			■	■	
8	LL					■	■					■			
9	LL		■			■						■			■
10	L					■						■	■		
11	L		■			■						■			
12	L	■	■			■									■
13	L					■		■				■	■		■
14	L		■			■	■								■
15	L		■			■	■	■							
16	M		■				■					■	■		
17	M					■		■				■	■		■
18	M		■							■		■			
19	M							■	■			■		■	
20	M	■	■			■	■					■	■		
21	M		■									■			
22	M	■				■				■			■		
23	M					■						■	■		
24	M				■	■						■			■
25	M		■	■		■						■			
26	M						■	■				■			
27	M					■		■							■
28	S	■			■	■									
29	S		■			■						■	■		
30	S	■			■	■									
31	S	■	■		■	■						■			
32	S		■			■						■			■
33	S	■	■					■				■			
34	S	■			■	■									
35	S		■			■		■		■		■			
36	S		■			■		■							
37	S		■					■				■			
38	S		■			■	■	■				■			
39	SS	■				■		■				■			
40	SS		■			■	■					■			
41	SS			■		■				■		■	■		■
42	SS		■			■				■		■			
件数	小	9	24	4	5	29	10	15	1	7	0	31	12	3	10

(3) 特徴毎の整理 小学校

No.	ア 組織的対応(校内)	イ 保護者
1	両親と学校が教育相談を継続して進展	家庭訪問は週1回、一日おきに電話連絡
2	生徒指導主事が本人、保護者に対応し見通しを示す	
3	主幹教諭、学年主任、担任で方針確認	
4	担任、担当教師、保護者の連携をこまめに焦らず手立て	学校と連携 送迎
5	担任、生徒指導主事、特別支援CD、副校長が連携	担任が母親と、副校長が父親と連絡、認識が近づく
6		
7	主幹教諭を中心に方針を確認して対応	学校、医療機関、モリーオと相談しながら寄り添う
8	校内指導体制を生かして対応	担任と電話や連絡帳で連絡
9	支援会議で方向性を確認して支援	面談により生活リズムの把握や触れ合いを依頼
10	随時のケース会議で確認して対応	登校させるため苦労している母親に感謝やねぎらい
11	生徒指導委員会で状況共有し連携	母親と子どもの様子について情報交換
12	生徒指導、特支、保健室の担当を分けず総合的視点	
13	ケース会議で短期や長期の目標設定で連携	
14	特別支援コーディネーターが対応を提案	
15	職員間で情報共有をしながら個別対応	担任、SCと面談を通して方向性を共有
16		母の労に寄り添い事実や状況を直接正確に伝えることを継続
17		悩みに寄り添う学校と共通理解
18		一緒に登校し学習を見守る等協力して支援
19		担任から電話連絡を継続、進路について相談
20	管理職、担任、SCが連携して対応	電話連絡の他、来校時は管理職も対応し密な連絡
21	月1回の生徒指導委員会で共通理解方針確認	担任、特別支援コーディネーター、SCで対応
22	ケース会議で共通理解と方針確認	
23	生徒指導委員会で対応を協議	トラブルの両者の保護者と学校が話し合い
24	指導養護教諭、養護助教諭、教務主任、副校長が連携	副校長、指導養護教諭、担任、両親で話し合う
25	生徒指導委員会で対応を協議	担任が電話、家庭訪問、管理職も含めて母親と面談
26	校内支援委員会を組織して対応	母親と副校長、担任が面談を継続
27	支援委員会で共通理解し方針を確認	
28	毎月アンケートを実施し、ケース会議で共有	
29	生徒指導委員会で情報共有、保護者、連絡調整、記録等役割分担	担任が面談、電話連絡、家庭訪問
30	職員間で共通理解する場を設定し多様な関わり	
31	個別支援会議で確認し、教務主任、養教等が担任と連携	面談時には担任に加え副校長も同席して不安解消
32	週1回情報交換で状況と方針を確認	管理職が祖母も含め面談し信頼関係
33		担任が電話連絡等で学校の様子を伝え関係を維持
34	いじめの防止対策を構築している	
35		毎日送迎し一緒に校舎に入る等連携
36		
37	ケース会議で役割や学習について確認	保健室での様子を養護教諭、担任から連絡
38	支援委員会で共通理解し方針を確認	予定を確認し、変更は事前に連絡
39	校長、担任外、事務職員が支援、職員で共通理解	連絡帳により学校の様子をこまめに伝える
40	職員会議やケース会議で対応確認	職員が困り感を受け止め労いながら協力
41	自尊感情を高める取組みを展開	担任が継続して連絡し、教育相談を実施
42	日々の情報を迅速に共有し相談しながら対応	担任が継続して支援し、面談も実施

No.	ウ 担 任	エ 居場所・絆づくり
1	家庭訪問は週1回、電話連絡は1日おきと確認し継続	
2	昼休みに友達を遊ぶことから学級にも居場所をつくる	相談室対応、友だちが迎えにきて徐々に教室へ
3	家庭訪問、保護者への電話連絡	
4	4年間それぞれの担任により支援、母親と連携	診断により情緒学級に措置変えして対応
5	母親と連絡を密にしながら児童を支援する	特別支援学級に措置変えして安心して生活
6		一旦別室で落ち着いてから教室へ
7	自己肯定感を高める関わり	教室登校か別室登校か本人が意思決定
8	保護者と継続して連絡を取る	通級指導教室へに通級
9	児童の背景を把握しながら寄り添った	特別支援教室に居場所を確保、イヤーマフを準備
10	家庭への電話、母親との面談、学級の環境整備	
11	児童と他児童の相互理解を促す	
12		共感と柔軟な登校への理解
13	本人、保護者と話し合い、粘り強く連絡連携	特別支援学級で2時間程度学習支援
14		特別支援学級に登校し、その後教室へ
15	本人の気持ちを受け止めて柔軟な対応	所属学級の隣の空き教室で学習し、可能は範囲で教室へ
16	本人との時間を確保 学校の話題は避ける	
17	母親の悩みに寄り添いながら、状況を把握	特別支援学級に通級
18	ノート交換で信頼関係を築きながら対応	保健室をベースに教室に向かい始める
19	担任が代わった際に引継ぎをし、粘り強く対応	
20	保護者と連絡を取り、児童を支援	玄関に一番近い家庭科室を居場所とした
21	子ども理解に務め、その立場に立って接した	教室から学習室、保健室に行くことを認めた
22	宿題を無理強いせず、できることから取り組ませた	
23		保健室や職員室で学習支援と学級の受け入れ態勢作り
24	毎朝連絡し、母親を含めて起床を促す等継続した関わり	保健室登校から特別支援学級との交流へ
25	児童、家庭と継続的に関わり支援	学級の受け入れる雰囲気づくり、学級委員の位置づけ
26	学級児童と興味があるものを作成し本人に届けた	
27	児童保護者との関係を絶やさないように粘り強く関わる	
28	アンケート結果を受け素早く個別対応、報告	
29	関係を切らさない学習が遅れないよう関わり	
30	日常的な観察と対話で早期発見対応に務める	
31	本人、保護者の困り感に寄り添い信頼関係を構築	
32		
33	学習の遅れ、提出物への配慮	趣味の同じ児童と同じ委員会に配属
34		
35	別室で算数を中心とした一対一の指導	別室ですこやかサポートが学習指導
36		保健室、相談室、他教室で対応、時差登校、放課後登校
37		保健室に登校 教室に行けるようになった
38	家庭訪問の際は、プリント等を届ける	傾聴で気持ちを聞き取り、会話で信頼関係を深める
39	担任が常に話しかけ結び付きを強めた	
40	学級の児童に本人の「困り感」への理解を求める	保健室に登校後教室に向かう 安心できる場
41	本人、保護者と信頼関係を構築	特別支援学級でできることを重視した学習
42	担任が自宅に迎えに行く等支援を継続	

No.	オ 学習支援	カ SC／SSW／不登校対策相談員
1		月 1 回SCによるカウンセリング
2	国算読書で学習面の課題に気付く	
3		
4	できることから少しずつ取り組ませる	
5		
6		SCが月 2 回母親のカウンセリング，本人も希望
7	教室外の専科学習から入り，教室へ	
8		
9		
10		
11		
12	特別支援学級に在籍変更し段階的に支援	
13	特別支援学級で学習支援	
14		
15		SCが本人，母親とカウンセリングし，学校にアドバイス
16		SCによるカウンセリング
17		
18		
19	タブレットに関心を示し，登校	
20	午前 3 コマ家庭科室で副校長が個別指導	SCが母親のカウンセリングを実施
21		SCが母親とカウンセリングを20回位実施
22	夏休みの課題をどこまでやるか自己決定	
23		SCが子どもとカウンセリング
24		
25		
26	学習支援を継続した	
27	長期休業中や下校後に教室で学習させる	
28		
29		
30		SCによるカウンセリング
31	すこやかサポートによる支援	すこやかサポートが学習を支援
32	板書，プリントを活用してテンポ良く学習	SAを特別支援学級のT 2 として支援体制
33	出席に重き，課題の提出を求めず，放課後個別指導	
34		
35	算数を中心に個別指導	
36		
37		
38	教室以外で国語，算数のプリント学習	支援委員会にSCも参加
39	わかる授業で学習不安を取り除く	
40		SSWの観察，指導で検査を勧める
41		SSWによる家庭を含めた指導
42		

No.	キ スモールステップ	ク 関係機関
1		
2	「母の仕事が休みだから自分も休み」の主張を受け入れ	
3	「登校したい」という意欲が高まることを待つ	
4	選択肢を示し、決定は常に本人に任せる	医療機関での診断から対応
5		警察と連携しながら通院につなげる
6		市教委の個別面談で助言を得る
7	給食に不安があり、弁当可とし安心	病院で心理検査、特性について共有
8		医療機関の受診を勧め、入院加療
9		
10		主治医のアドバイスを家庭と共有
11		
12		
13	保護者の願いが児童の負担 本人ができることを	医療機関の助言を受けて対応
14		
15		
16		「心の状態」を色分けして尋ねる～主治医のアドバイス
17		福祉、児相、病院と連携を図りながら対応
18	タッチ登校から保健室登校を経て教室へ	
19		
20		
21	本人ができる時間で登校。無理強いしない 別室も認める	
22	「宿題をやって遅刻」か「宿題をやらず遅刻しない」か選択	主治医より「無理強いせず、選択肢で自己決定」
23	登校時間を遅くする等により段階的に対応	
24		
25		
26		
27	車で送られてきた本人を徐々に校舎内に	医療機関と連携
28		
29		市教委、未来部、児相、フリースクール、学校が連携
30		
31		
32	翌日が楽しみになるように予定を知らせる	
33		
34		
35	時間登校により登校の負担感を軽減	
36	放課後登校、時差登校で柔軟に対応	
37		
38		
39		
40	発達検査を実施し、結果を生かして対応する	巡回相談での助言を生かした
41		児童館、保健師、相談員を含め支援会議
42		福祉関係の家庭への支援

No.	ケ 進路指導	コ ひろば「モリーオ」
1		両親の同意により入級し，毎日通う
2		
3		
4		
5		
6		
7		本人が興味を示したため通級 指導方針の共有
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16		
17		
18		
19	母親から支援学校への進学について相談	入級し数日通う
20		
21		
22		
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
41		
42		

No.	サ 自己有用感	シ 特別支援教育
1		
2	学習のつまずきへの支援で自己肯定感が高まった	
3		
4	日程と選択肢を示し、考える時間を与え、自信を持たせた	3年生の診断で特支に措置替え、改善に向かう
5		
6		
7	友だちとの関わりで存在意義を感じる	
8		
9		特支の中に心を落ち着ける場所を設定
10		
11		
12		特支での学習…自己決定を繰り返し…意欲の高まり
13		
14		特支に登校し、様子をみながら学級に入る
15		
16		
17		特支に通級して国語と算数を学習
18		
19		
20		
21		
22	自己肯定感が低く、無理強いせずエネルギーを貯める	
23		
24		
25		
26		
27		
28		
29		
30		
31		
32		
33		
34		
35		
36		
37		
38		
39		
40		
41	できることを重視した教科学習を実施	できることを重視した教科学習 良さを生かす生活単元
42		

No.	ス 未然防止・早期発見対応
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	低学年からの記録を引き継ぎ医療機関につなぐ
9	
10	
11	
12	
13	
14	
15	
16	
17	
18	
19	
20	
21	
22	早期にケース会議を開き方針を確認して対応
23	
24	
25	
26	
27	
28	毎月のアンケートで早期発見対応…心の変化に気付く
29	
30	児童会の「いじめゼロ宣言」，アンケート，児童理解
31	渉り，遅刻が目立った時点で組織対応
32	
33	
34	いじめアンケート，ソーシャルスキルトレーニング，QU
35	
36	
37	
38	
39	不安を抱える児童に結び付きを強め，不安を解消
40	
41	
42	

(4) 学校の考察とまとめ 小学校

No.	考察とまとめ	
	①	②
1	担任が保護者との関係を絶やさず関わり続け信頼を得た	信頼を得たことでSC, モリーオにつなげた
2	遊び時間、好きな教科から教室に入ることができた	しぶりの原因が学習にあることを捉え、支援して自己肯定感を持たせた
3	担任が本人保護者と粘り強く関わり続けた	本人の「登校したい」という意欲が高まるのを根気強く待った
4	不登校に至った原因を踏まえて、気持ちを少しずつ変えていった	担任、担当教師、保護者の連携を図り、焦らず実践
5	父親とつながり続け、学校と家庭の認識を近づける	警察、医療との連携から特別支援学級に措置変え
6	SCのカウンセリングでは母親が安心して相談できた	個別相談会では、指導の手掛かりを得る事ができた
7	関係機関の情報をもとに、根気強く段階的に支援	主幹教諭、担任、モリーオ、医療機関が連携して支援
8	低学年からの記録の蓄積により素早的確に対応	校内体制により様々な視点からの支援
9	家庭の「困り感」を共有し触れ合いの大切さを伝えた	1年生ならではの初めてのことに対応する支援
10	家庭の思いや願いを聞き、子どもと家庭の両方に必要な支援	主治医からの対処法を学校と家庭で共有して支援
11	生徒支援委員会でそれぞれの役割を明確にし確実に実行	保護者の「困り感」に寄り添い、要望に即時的に対応
12	「ほんとうは自分も学習したい」という願いに応える学びの場	特別支援学級で自己理解を深め、小さな挑戦を重ね、意欲
13	ケース会議で短期長期の目標を明確にし、連携して対応	特別支援学級で学習支援を行った
14	特別支援学級が安心の場所となり、教室へのステップ	困ったことがあると、一旦特別支援学級で落ち着く
15	本人ができそうだと思う学習から自信につなげた	職員間で情報共有しながら個別対応を考えた
16	親子関係の課題を見出し、担任が間に入って解決	子どもと仕事の板挟みとなる母親へのメンタルケアが必要
17	専門的な関係機関との連携により改善につながった	母親を支える立場で関わり続け、共通理解で改善した
18	本人の希望を受け入れ徐々に信頼関係を作っていた	保健室に居場所を作り、教室にも行く
19	担任が本人や保護者との関係を絶やさないように粘り強く関わった	母親の進路への不安や疑問に寄り添い対応
20	担任、管理職、SCが連携して保護者と連絡調整にあたった	保護者と目標を共有して取り組む
21	担任が子どもを理解し、その立場に立って対応した	
22	早期にケース会議を開催し、方針をもって対応した	医療機関との連携により的確に対応できた
23	保護者を含めた話し合いによる和解でトラブルを解消	心の底に抱えているものを周囲が聞き取ることで解消
24	担任が保護者との連絡を密に行い、的確に対応	生徒指導委員会、校内支援委員会で共通理解
25	担任が家庭と継続的に関わり続け、母親の悩みに気付き相談	本人を受け入れる学級の雰囲気
26	家庭訪問等により学習状況を交流した	学級でDVDを作成しプレゼント 心情面に訴えた
27	担任が本人、保護者と粘り強く関わり続けた	職員が協力して担任を支え続けた
28	毎月のアンケートが児童の変化に気付く一助	アンケート結果に担任が対応、報告することで早期対応
29	精神疾患を持つ母親に寄り添って支援	担任一人で対応させない体制、役割分担
30	担任のみならず全校体制での取組が大切	
31	個別支援委員会で方向性を確認し、解消未然防止	担任の児童、家庭への継続的な関わりが信頼感に
32	精神的にも安定し、学校にいる時間が長くなっている	無理をさせずに有効な支援策を講じていく
33	学習面で本人の気持ちに寄り添って支援した	担任が保護者と粘り強く関わった
34	毎月のいじめアンケートでトラブルや不安感を把握して対応	ソーシャルスキルトレーニング、QUを活用
35	担任とサポート教員が継続して関わり安心感を与えた	今できる最良な選択肢を用意して取り組みを進める
36	保健室、相談室に加えて礼法室でも対応可にした	突発的な事案へも個別対応が可能になった
37	保健室に登校後、教室で授業を受ける 保健室で過ごすことも	イライラが関わる養護教諭に向くことを改善したい
38	本人や保護者と粘り強く関わり続ける	タイミングを捉えて、本人の気持ちに寄り添った支援
39	事前に不安を聞き取り、入学当初から効果的に関わり	職員会議で情報を共有し、全職員で組織的に対応した
40	特性を理解し、「困り感」に応じた対応をした	安心できる場をつくり、寄り添いながら支援
41	担任が本人、保護者にきめ細かくかかわった	良さを認め励ますことで自尊感情を高めた
42	担任が保護者と共に考え、不安を払拭している	組織的対応で担任一人で抱え込まず、全体で支援

No.	考察とまとめ
	③
1	モリーオで人との関わりができるようになり登校
2	本人の特性を理解して柔軟に対応
3	本人に寄り添った支援で欠席が長引かないようにした
4	選択肢を与え、自己決定することにより自信を持たせる
5	担任が抱え込まないようにし、関係機関とも連携
6	
7	できた活動を認められることで自己肯定感を高めた
8	
9	無理強いせず、できることを増やしていった
10	結果を焦らず、子どもの育ちを見守っていく校内体制
11	本人を肯定的に受け止め、信頼感を築き、粘り強く対応
12	電話連絡の共有、ホワイトボードで出欠共有
13	本人が安心して活動できるように支援
14	特別支援学級在籍の児童が交流学級に行く際に同行できた
15	SC面談を継続しながら適切な支援について助言を受けた
16	朝、心の状態を色分けして表すことで安心して生活
17	
18	小さな一歩を一緒に喜び、次の一歩を提案
19	
20	信頼関係ができた副校長との関わり、教室に入る方策を検討
21	
22	
23	
24	
25	学級委員となり、意欲的に登校する
26	校内支援委員会を組織し、保護者との面談を行った
27	医療機関の支援を得た
28	
29	希望によりフリースクール通級 連絡を取り合う
30	
31	渋り、遅刻が目立った時点で個別支援委員会の方針確認
32	
33	
34	
35	
36	登校意欲につながり、学習にも取り組めるようになった
37	
38	医療機関や相談機関との連携を図る
39	
40	
41	関係機関による家庭への継続した支援が必要である
42	

不登校への効果的な取組事例 分類と整理 3 中学校 (1)事例の概要

No.	校種	学級数	概 要	注目
1	中	LL	スモールステップ表を活用した学習室での支援	
2	中	LL	相談担当を中心にSC, SSW, 担任, 学年が連携	◎
3	中	LL	担任を中心に組織的な支援で自己有用感を高める	◎
4	中	LL	相談室での学習を経て進級時に教室復帰	
5	中	LL	SSW・教育相談担当が両親と面談し教室へ	◎
6	中	L	3年生進級のタイミングを捉えて進路指導	
7	中	L	担任, SSW, 医療機関の連携により再登校	
8	中	M	「相談室」「特別活動室」複数の学習の場を設置	◎
9	中	M	担任を中心として, 組織体制で存在感, 居場所づくり	◎
10	中	M	少人数学習支援室, 個別学習支援室で安心と学習を保障	◎
11	中	M	連携して保護者に寄り添う支援	
12	中	M	別室で居場所と学習を保障し教室復帰	◎
13	中	S	自己決定を尊重し, 学習支援により登校を継続	
14	中	S	家庭, 本人, モリーオとの継続的な関わりから学習指導へ	
15	中	S	担任の生徒, 保護者への関わりで別室登校から教室へ	
16	中	S	別室登校を継続しつつ高校個別見学で進路意識を高めた	◎
17	中	S	進路意識の高まりと文化祭で学級の意識を高めて相乗効果	
18	中	S	担任が支援, 学年主任の面談で自分を見つめさせる	
19	中	S	保護者との信頼関係をテコに回復へ	
20	中	S	学習支援室での個別学習で登校継続	◎
21	中	SS	スマホ依存の生徒への保護者を含めた組織的な対応	
22	中	SS	保護者との連絡を密に保健室登校で個別指導	
学級数 SS:1~5 S:6~10 M:11~15 L:16~20 LL:21学級以上(特支を含む)				

(2) 特徴の一覧 中学校

■ 特に中心となる取組み

■ 関連する取組み

No.	学級数	未然防止	居場所絆	自己有用感	早期発見	校内組織	相談活動	学習支援	進路	スモールステップ	部活動	保護者対応	関係機関	モリ	特別支援
1	LL					■		■		■					
2	LL					■				■		■	■		
3	LL		■	■		■		■				■			
4	LL		■			■		■							
5	LL					■	■					■		■	
6	L		■						■			■			
7	L					■		■				■	■		
8	M		■			■		■		■		■			
9	M		■	■		■	■	■		■					
10	M		■			■	■	■							
11	M					■						■	■		
12	M	■	■			■		■							
13	S					■		■		■					
14	S							■	■	■		■		■	
15	S		■				■				■	■			
16	S		■	■					■						
17	S		■			■				■					
18	S			■		■	■		■						
19	S		■		■	■	■				■	■			
20	S		■					■							
21	SS		■			■		■				■			
22	SS		■			■			■				■		
件数	中学校	1	14	4	1	17	6	12	5	7	2	11	4	2	0

(3) 特徴毎の整理 中学校

No.	ア 組織的対応(校内)	イ 保護者
1	週1回のプロジェクト会議 障がいの研修	
2	教育相談担当がSC, SSW, 担任, 学年と連絡調整	父のDV…SCが母親とカウンセリング 祖父が学校へ送迎
3	週1回生徒支援会議	焦らず本人が行動を起こす日を待つことで関係も改善
4	生徒支援会議で方針を確認	
5	週1回の支援会議に加えて教育相談係会を開催	
6		担任が定期的な家庭訪問で信頼関係
7		担任が定期的に家庭と連絡相談
8	週1回情報交換会 SC養護教諭	担任による連絡 確認により見通しを持たせる
9	週1回の教育支援部会で情報共有と方針確認	定期的に家庭訪問 本人が下校する前に様子を家庭連絡
10	週1回主任会議,	担任, 学年主任, 保護者で相談会
11	校内支援委員会で支援方法を確認	学年主任が母の務める飲食店を月1回訪問
12	週1回相談委員会で情報共有と方向性の確認	
13	関係する職員で関わり方を共通確認	保護者と対応を確認し, 送迎等の協力依頼
14		毎週金曜日, 家庭訪問又は母が来校
15		母早朝からの勤務 担任とメール 車で送迎
16	支援委員会で方針確認	
17	担任を軸に, 支援員, 教科担任が連携, 校長が意味付け	
18	教育相談連絡会で情報共有, 学年主任が面談し自分を見つめさせる	学校の様子を伝え, 都合つく時間に本人を連れてくる等協力
19	生徒指導会議を開催 多くの職員が関わる	前任校での姉と関わりから校長に信頼を寄せた
20		欠席連絡を依頼 担任から連絡
21	教育支援委員会で課題を確認し組織対応	校長, 副校長, 養教がゲーム対策を確認
22	相談会(ケース会議)を隔週で開催 SC, 養教も参加	

No.	ウ 担 任	エ 居場所・絆づくり
1		「相談室」で別室登校対応 利用きまり再確認
2	クラスメイトがランチボックスを届ける	学習室で学習指導と支援
3	家庭訪問（週2回程度）、学校の様子を伝え、状況把握、本人・母親を励ます	「相談室」で相談員や担任と学習
4	本人が復帰しやすい環境づくり	「相談室」で学習、学級編成を配慮
5	継続して家庭と連絡を取る	
6	家庭連絡と家庭訪問を細目に	
7	生徒・保護者と粘り強く関わり信頼感	別室で対応
8	窓口となり対応 家庭訪問や定期連絡で信頼関係	「相談室」「特別活動室」から選択させる
9	生徒が好きな話題から会話し、がんばりを認め、信頼関係	〇〇ルーム（別室）で自分のペースで学習
10	休みはじめた頃から家庭訪問	「個別学習支援室」「少人数学習支援室」に担任を配置し柔軟に支援
11	誕生日にちょっとしたプレゼントを贈る	
12	一日のスケジュールを確認	別室に支援員、SAを配置して個別の支援
13		「相談室」で1時間程度の学習
14	家庭訪問の際は、本人と会い声掛け	
15	早朝勤務の母親と繋がりを絶やさず支援	別室で支援員が対応
16	関わる回数を増やすようにした	別室で対応 1日のスケジュールは自己決定
17	良好な関係構築、見通しを持たせる 学級への指導	学級の意識が高まり合唱練習に誘う
18	保護者と連絡を取り、対応を依頼、家庭訪問	
19	保護者との連絡を密にする	
20	本人・保護者と信頼関係	会議室で1～2時間程度の学習
21	学級生徒と関わりを持たせ、母親の悩みに寄り添う	
22	保護者と連絡を密にする	保健室で過ごし、担任・養教が対応

No.	オ 学習支援	カ SC／SSW／不登校対策相談員
1		
2		SC：母親とカウンセリング SSW：他機関との連絡調整
3	相談室で教科学習，夏休み中に5日間登校し学習	定期的に母親のカウンセリング
4	相談室で個別の学習を支援	
5		SSW：両親と面談 教育相談担当と対を検討
6		対応方針についてアドバイス
7		SSWの家庭訪問，学習支援，きめ細かい対応
8		
9	家庭の学習課題は無理させないように	
10	個別学習支援室，少人数学習支援室で教科担当が指導	毎週のカウンセリングを実施
11		
12	別室で興味ある教科から学習，宿題の負担感を除く	
13	教員免許を持つSAが学習指導	定期的にSCによるカウンセリング
14	興味のある美術の先生の空き時間に登校，他教科に	
15		不登校対策支援員と連携
16		養教，支援員が本人に寄り添い
17		支援員がコミュニケーション
18		
19		
20	1～2時間 会議室で学習	SC, SSWが本人，保護者を支援
21		
22		SCが本人，保護者と面談

No.	キ スモールステップ	ク 関係機関
1	スモールステップ表を活用	
2	教室廊下前で授業を受け、復帰に向ける	児相，市子ども青少年課の協力で家庭支援
3	夏休み5日間登校し3時間程度学習でリズム確保	
4		
5		
6		
7		ケース会議，ゲーム依存回復プログラム，生活習慣改善
8	放課後登校→10時から14時の時間限定で登校	
9	スモールステップを心掛け	
10	登校のリズムが出来て少人数学習支援室で教科学習	
11		市子ども未来部を通し通信を届け信頼関係
12		
13	「タッチ登校」を認め，自己決定を尊重	
14		
15		
16		市子ども家庭総合支援セ，県福祉総合相談セ，病院と連携
17	本人を支援しつつ，学級の機運を高め教室復帰へ	
18		
19		
20	登校刺激を与えない	病院を受診
21		
22		病院と連携

No.	ケ 進路指導	コ ひろば「モリーオ」
1		
2		
3	3年生となり進路について考えはじめたことを契機	
4		
5		保護者との相談会場としてモリーオを活用
6	3年生となり進路について考えはじめたことを契機	
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14	モリーオの高校見学会で進路意識，登校意欲	定期的に情報交換 高校見学会で進路意識が高まる
15		
16	高校個別見学を実施，レポートを作成させる	
17	進路意識を高める働きかけ	
18	進路の悩みを受け止め方向づけで前向きに	
19		
20		
21		
22	オープンスクールや体験授業，相談会に参加	

No.	サ 自己有用感	シ 特別支援教育
1		
2		
3		
4		
5		特別支援学級に入学後，学年を追って改善
6		
7		
8		
9	得意なこと頑張れることを意思決定 できたことを価値付け	
10		
11		
12		
13		
14		
15		
16	作業を依頼し，仕事をほめた，多くの先生が関わる	
17	行事で集団の成長を目指し，事中にも振り返りを実施	
18		
19		
20		
21		
22	行事，部活への参加を促し自己有用感	

No.	ス 未然防止・早期発見対応
1	
2	
3	
4	
5	週 1 回の支援会議に加え，教育相談係会できめ細かい検討
6	
7	
8	月 1 回の生活調査アンケート実施
9	
10	
11	
12	
13	
14	
15	
16	
17	
18	
19	
20	
21	
22	

(4) 学校の考察とまとめ 中学校

No.	考察とまとめ	
	①	②
1	スモールステップ計画表により自分で目標を設定させた	
2	校内での情報共有，本人家族の不安を取り除くことで改善	
3	生徒支援会議により組織的に取り組む	担任が常に寄り添った対応で信頼関係構築
4	本人の意向を尊重し，安心して過ごせる対応	相談室担当，担任，教科担任が声がけと学習支援
5	担任が月に数回家庭連絡	SSWと教育相談担当が生徒を洗い出し，対応策を検討
6	担任の継続した家庭訪問により信頼関係を構築	3年生となり進路への関心が高まったことから改善
7	担任がSSWと情報共有し，タイミング良く支援	病院でのゲーム依存回復プログラム，生活習慣改善
8	担任が保護者に寄り添い，一緒に考え，できることから	週1回情報交換会，月1回アンケートで早期発見
9	校長のリーダーシップのもと担任，SC，支援員，学年が連携	得意なこと，頑張れることを自己決定させ価値付けることを継続
10	2つの居場所で安心安全と学習を保障	学習支援室の担任，SA，支援員が学習をサポート心も安定
11	校内で組織的に確認し支援 うまくいかなかった場合の対応も	子ども未来部，フリースクールと情報交換
12	心の安定のための居場所作りで別室登校を維持	個に応じて学習環境を提供し，不安を取り除く
13	タッチ登校等，本人の自己決定を尊重	関係職員で本人の特性や関わり方について確認
14	本人，家庭，モリーオとの継続的な関わり	本人の興味関心に合わせた学習指導
15	相談活動等で担任，本人，保護者の関係づくり	別室は支援員，実技教科は学級で 個に応じて対応
16	高校個別見学の実施により進路意識を高めた	学習への取組み姿勢も改善
17	担任，支援員，教科担任の連携と校長が意味付け	文化祭取組で学級の高まりが教室復帰に
18	友だちの大切さと関わり方を考えさせ，気持ちに変化	学校が家庭と本人の状況を共有し，支援を継続
19	本人の気持ちに寄り添えなかったことを反省し改善	職員の共通理解と一致した行動が信頼を得る
20	担任と本人，保護者の関係が良好で，別室登校で安定	今後は他生徒との交流，教科学習を目指したい
21	担任，職員，SC，支援委が課題を細かやかに確認して対応	社会性を身に付けさせることが課題
22	安心できる居場所でのコミュニケーションでタイミングを捉える	学校行事，部活動で他生徒と時間を共有して自己有用感

No.	考察とまとめ
	③
1	
2	
3	担任が母親との信頼関係を築く
4	進級時の学級編成上の配慮で安心感
5	週 1 回の支援会議に加えて教育相談係会を新設
6	
7	
8	
9	改善が見られても支援を絶やさずに対応を継続
10	
11	進級時には、しっかりと職員の引継ぎ，信頼関係構築
12	
13	SCのカウンセリングを定期的に実施
14	
15	別室利用の 3 年生が卒業すると一人になると伝え，教室復帰を促す
16	本人から母親に進路希望について話すようになった
17	
18	教育相談連絡会で情報を共有し，職員が組織的に対応
19	校長が前任校で関わり保護者の信頼を得ていたことから好転
20	SW, SSWによる本人，保護者を支援
21	市教委個別相談会に参加し，担任が安定
22	高校進学に向けた取組と合格により生活リズムを改善

Ⅲ 考察

ア 組織対応（校内）

特徴的な事例	
小学校	【小 7】「養教が朝、登校してきた本人と保護者に…主幹教諭が学習支援や相談」「担任が学級に入りやすい雰囲気作り」 【小 14】「特別支援学級の情報交換会で、特別支援学級担任が悩んでいることに対して、校長、副校長、教務主任からアドバイスと対応について協議」 【小 31】「夏休み中に、家族と担任、校長、副校長で2学期からの対策について相談」 【小 8】「早急に生徒指導委員会を開き…いじめと認定した後はいじめ対策委員会に切り替え情報共有…」 【小 15】「養教、特別支援教育コーディネーターを含めて生徒指導委員会を開催…担任だけでなく養教が主に対応」 【小 19】「低学年からの記録によって次の担当者が把握できるように…それによって教育相談を効率的に行い…」
中学校	【中 13】「校長のリーダーシップのもと、S C、支援員、学年スタッフが協力・連携し、関係を絶やさず粘り強く関わり続けた」 【中 7】「校長、副校長、主幹、生徒指導主事、学年主任、養護教諭、S C、相談員が参加し週1回開催している生徒支援会議で共通理解を図りながら方向性を確認」 【中 1】「支援員も参加し共通理解を図り…支援方針を検討…期末保護者面談で校長、副校長、養護教諭が同席し両親に方針を説明した」 【中 9】「毎週行われる生徒支援会議で…支援方法の確認をした」 【中 14】「大規模校で対象生徒が多く、議論を深めることが難しい状況があったことから、具体的な役割分担や関係機関との連携などについて話し合う場として教育相談係会を設定し、支援の充実と担任の負担軽減を図っている」 【中 21】「学年主任が本人と2時間面談。自分を見つめ号泣。すべきこと等について具体的に話し、その後休むことなく登校」

＝考察＝

各校から報告された効果的取組事例の多くに共通するものが「組織的対応」であった。

管理職を含めて関係する職員が、心配される児童生徒について情報を共有し、対応方針を検討する会議は、多くの学校で開催され、組織的対応の根幹となっている。

メンバー構成は、校長、副校長、生徒指導主事（適応指導担当）に加えて、主幹教諭、教務主任、学年主任、養護教諭、S C、不登校対策相談員等が加わる等、学校規模や校内体制によって工夫されている。開催時期としては、毎月、毎週、随時と状況により様々であるが、大規模校で多くの事例がある場合に、更に係会等を設定することにより、詳しい検討を行ったり、長期休業中に新学期に向けた対策を確認した事例もあった。様々な教育活動を進める中で、打ち合わせ時間の確保にも様々な工夫がなされている。

実際の対応場面で組織的対応を行った事例としては、期末面談の際に、管理職も加わって保護者と話し合い、対応について保護者の理解を求めたり、学年主任が生徒と相談をして効果をあげたり、児童が遅れて登校する際に担任外が対応したり、保護者と児童で対応の担当を分担した事例もあった。

また、記録を残して引き継いでいくことで、効率的かつ継続的な組織対応につながっているという事例もあった。対応が年度を超えて長期間に及び、担当者が替わることもあるだけに、記録を残し引き継ぐことも組織的対応を進める上で大切なポイントとなっている。

イ 保護者

特徴的な事例	
小学校	【小 1】「父親との方針の違いから、母親が登校させようと毎朝苦勞していることへの感謝やねぎらいの気持ちを伝える」 【小 11】「母親の労に寄り添い協力を得るように務めた。事実や状況を直接、正確に伝えることを継続した」 【小 12】「担任が保護者との関係を絶やさないように、長期間にわたって粘り強く関わり続け…保護者の信頼を得られた」 【小 10】「父親とつながり続け、校内での情報共有…学校と家庭の認識が近づき、不登校の要因を取り除いた」 【小 30】「養教、担任が定期的に保護者と話し…受診を勧めた。」 【小 37】「情報を交換、共有し対応…徐々に自分の気持ちを伝えられるようになった」
中学校	【中 2】「学校に不信感を持つ保護者の不安を受け止め、情報交換し、見通しについて確認。保護者の不安や悩みに寄り添う姿勢で話を聞く…」 【中 6】「父のDV…SCが母親とカウンセリング…母親の心身の状態が不安定…できることなどを確認しながら…不安解消に向けて取り組んだ」 【中 13】「本人のがんばりを下校する前に家庭に電話連絡」 【中 10】「2年生から継続して粘り強く家庭訪問を行った」 【中 11】「学年主任が母の務める飲食店を月1回訪問して配布物を渡したり、学校の様子を伝えたりした。」 【中 12】「母親は早朝からの勤務…連絡が不通になることも多かったため、メールによる連絡を中心に。母親とは機会を捉えて継続的に相談会を持ち、願いを受容した。」 【中 16】「支援委員会で、キーパーソンは母親で、支援が必要であることを確認…」 【中 8】「今年度着任した校長が、前任校で姉の指導で関わっていたこともあり、保護者はとても喜んでいて。とても良好な関係を保っている。」

＝考察＝

各校から報告された効果的取組事例の多くに共通するものが「保護者」であった。保護者と信頼関係を築き、連携を図ることを重要視した対応により効果をあげていることが改めて明らかになった。言い方を変えるならば、保護者との信頼関係や連携が築けなければ、効果をあげることは難しいということを示している。促してもなかなか登校できない子どもを前にした保護者の動揺や不安は大きなものがある。学校の対応や教師に疑問や不信感を抱いていることも十分に考えられる。改善に向かうためには学校と保護者が信頼関係を深めながら連携していくことが欠かせない。

そのために、保護者の心情に寄り添い、送迎等の対応に感謝を伝えたり、労をねぎらうことを関係職員で確認して取り組んだり、更に踏み込んで、母親の仕事の都合に合わせた連絡や訪問をすることで、信頼関係を深め、改善に向かっている事例もみられた。

また、母親の心の安定を図るために、SCによるカウンセリングを継続した事例もあった。昨今、様々な事情を抱えている家庭も少なくない。経済的な困窮や、DV等夫婦間の問題、親自身の心身の状態等で悩みを抱えていることもある。SCによるカウンセリングを継続し、母親の心の安定を図り、学校に信頼を寄せたことが子どもにも良い影響を与えた事例や、SSWの関わりにより、福祉サイドからの支援が得られたことにより子どもの不登校が改善に向かった事例も報告されている。着任した校長が前任校で関わっていたことで、学校に対する不信感が信頼に変わり状況が好転した事例は、偶然によるものではあるが、信頼関係を築くためのきっかけを模索していくことの大切さを示しているとも言えるだろう。

ウ 担任

特徴的な事例	
小学校	【小 24】「担任が、本人や保護者との関係を絶やさないように粘り強く関わり続けた。毎年担任が変わっても、引継ぎをしっかりと行い、粘り強く…」 【小 27】「担任は家庭訪問や電話での連絡を取り続けた。家庭訪問では、配布物やプリントを持参し…家庭内での『困り感』に気づき悩みを聞く」 【小 41】「毎朝早く出勤し、車の窓からやり取りを始め、現在は車から降り 10m 位前に出て課題の提出ができるように…粘り強く関わり続けた」 【小 39】「家庭訪問を期に登校について話し合う」
中学校	【中 13】「(緘黙の生徒に) 担任は、本人が好きな話などから会話を引き出すことに務め、やりきったことを認め、称賛し、信頼関係の構築を目指した」 【中 5】「担任は、家庭と連絡をとりあう…家庭訪問…母親への電話連絡で悩みを聞いたり…保護者との関係が切れないように相談し続けている」 【中 12】「担任が継続的に家庭と連絡を取っていた。家庭連絡と家庭訪問を月に数回のペースで行っていたことが…学校とのつながりを感じ、相談に至った」 【中 17】「学級の様子は本人にリアルタイムで伝わっている。行事への参加が部分的なものになっても本人が困らないように配慮…学級の生徒には、折に触れて状況を伝え、クラスの一員であることを意識させ…友人を迎えに行かせる」

＝考察＝

生徒や保護者を支え導くと共に、学校とのパイプ役でもある担任の果たす役割の大きさは言うまでもない。ほとんど全ての事例で、児童生徒に担任が寄り添い、関わり続けながら、日常的に家庭訪問や電話連絡を行い保護者と連携を密にしている。家庭訪問の際は、プリントや配布物を届ける等、粘り強く関わりを継続していく中で好転した事例もみられた。解決の糸口が見えない中でも粘り強く関わりを絶やさないことが重要であろう。その際、本人や保護者にとって過度な負担とならないよう、家庭訪問や電話連絡のタイミングを一定にする等の配慮した事例も参考としたい。

また、学級への復帰に向けては、受容的な学級環境作りも行っている。学級の大切な一員であることを折に触れて意識させていくことも担任の大きな役割となっている。

一方で、担任一人で抱え込まないことも大切である。不登校の対応は、一筋縄ではいかず、長期間の取組となることも少なくない。不登校の出現率を考えると、学級に2人、3人と不登校が心配される児童生徒がいることも十分に考えられる。担任への心理面、時間面、業務面の負担が過剰になることも考えられる。加えて学習指導、生徒指導、保護者対応、校務分掌、部活動等々受け持つ業務も様々である。学校全体で連携して担任を支えていくこと、担任は遠慮することなく周囲に協力を求めることが大切であろう。

エ 居場所・絆づくり

特徴的な事例	
小学校	【小 28】「教室に行けなくてもここ（保健室）でいいのだ」と感じてもらえるような居場所を作ることができた。…安心感につながった」 【小 17】「別室登校（保健室・相談室・他教室）、時差登校、放課後登校で対応、学校がどの子にも最適な場とするため…」 【小 35】「安心できる場所をつくり、寄り添い支援するとともに…学級の児童にも『困り感』への理解を求めた」
中学校	【中 2】「相談室と特別活動室、複数の学習の場を準備し、安心して登校できる体制を学校全体で整えた」 【中 6】「不登校生徒の居場所であり学習の場である中央学習室を設置している」 【中 15】「少人数学習支援室（5組）、個別学習支援室（6組）を設置して3年目。6組から5組の授業に入る等、個に応じた対応が心の安定につながっている」 【中 9】「相談室は安心して過ごすことができる場所であり、計画を立てて自習したり来室した教科担任から学習を教わったりしながら落ち着いて過ごしていた」 【中 19】「集団不適応の受け入れ場所として空き教室を1つ当てている。支援員、SA、別室担当教員の3名を配置」 【中 22】「保健室は安心して過ごせる場所で…自分のことや家庭のことなどを担任や養護教諭にたくさん話していた」 【中 20】「会議室で1～2時間程度の学習…継続して登校できるよう配慮」

＝考察＝

中学校では、教室に入れない生徒が過ごす場としての相談室、学習室等が設置され、不登校対策相談員の協力を得て支援が行われている。自学が中心であるが、教科担任による授業を実施し成果をあげている学校もみられる。小学校では、対象児童が中学校と比べると少なく、担任外の教員が限られることもあり、保健室の他、特別支援学級に一時的な居場所を設けている例が多いが、空き教室の利用により児童に合った場を選択する学校もみられる。

不登校の理由は様々であるが、共通することは「(学校に)居場所がない」ということだという。「居場所」には、空間としての居場所と心の居場所の両面がある。空間としての居場所としては、教室が確保されていることに加えて、周囲からの視線が遮られていることや、教室の音が外に漏れないこと、長時間過ごすことを考えると一定の広さがあることやトイレへの動線も大切なポイントだろう。更には、掲示物等により潤いのある教室環境を確保することも大切であろう。心の居場所としては、登校した際に、先生が温かく迎え入れてくれることや、会話等のコミュニケーションがあること、自分がここに来ることで成長していけると感じるができることが大切であろう。人的にもスペース的にも限られた中ではあるが、個々の異なる状況に柔軟に対応できる環境を整備し、その適切な運用を図り学校に居場所を作ることが不登校の抑止や改善に向けて大きなポイントとなるだろう。

オ 学習支援

特徴的な事例	
小学校	【小 22】「国算読書で学習面の課題に気付く」 【小 4】「できることから少しずつ取り組ませる」 【小 20】「出席できることに重きをおいて、課題等の提出については積極的に求めることはしないこととした」 【小 24】「タブレットに関心を示し、登校」 【小 31】「午前3コマ家庭科室で副校長が個別指導」
中学校	【中 13】「家庭で取り組める学習課題を無理が生じないように配慮しながら提示」 【中 15】「居場所確保、学習保障という観点から少人数学習支援室・個別学習支援室の体制を作って3年目。教科担任による授業…安心安全、学習保障ができる大切な居場所となっている」 【中 7】「今年はその日の目標を決め、学習を行い、相談員や担任とともに学習することも増えた。期末テストで高得点を取り自信を持つことができた。教科担任とも学習することができた」 【中 18】「興味のある美術の先生の空き時間に登校から他教科に広がる」 【中 19】「別室学習では興味のある教科を切り口に学習を進め、それらの教科は学級に戻って授業を受けられるようになった」

＝考察＝

現在、担任や支援員のサポートによる自学が中心となっているが、学校の工夫により、可能な範囲で教科担任による学習指導の機会を確保し、成果をあげている学校もみられる。教室で授業を受けられないことによる学習の遅れは、本人や保護者の不安を増長させ、進学希望を見失い、自尊感情の低下、親子関係の更なる悪化を招くことも考えられる。学習を通して達成感や成長を実感することは、心のエネルギーの回復や安心感にもつながるだろう。興味のある教科を切り口に学習を進めたことで、その教科は学級に戻って授業を受けられるようになったり、期末テストで高得点を取って自信を持ち、教科担任と学習をすることができたりと、学習をきっかけに前向きになっている事例がみられる。

小学校では、学年を追って学習面での課題が顕在化するケースがあり、児童に応じた指導を進めながら、状況によっては専門的な検査や診察につなぐ対応も行われている。

課題（宿題）が過重にならない配慮をした事例もいくつかみられた。学校への不適応がはじめに表面化するのが「課題の提出」でもある。様々な事情により、やっとの思いで登校してきた児童生徒に、その背景を理解することなく、一方的に課題の提出を迫れば不登校につながる可能性もある。課題の提出が滞った背景を理解し、教科担任間でも情報を共有し、場合によっては思い切った軽減を図る等、きめ細かい個別の配慮も必要となるだろう。

タブレットに興味を示して登校した事例もあったが、今般配備されたGIGA端末を活用した事例にも今後期待したい。

カ SC/SSW/不登校等対策相談員

特徴的な事例	
小学校	【小16】「SCの教育相談では、母親も安心して悩み相談…専門的な視点から今後のアドバイス」 【小34】「SCと母親の面談で話を聞き、アドバイス。計20回位…母親にとって大きな支えに…」 【小6】「月に2回程度SCとの面談を継続。専門的な見立てをもとにした適切な支援について助言をもらう」
中学校	【中6】「SCが本人母親とカウンセリング…母親の心身の状態や不安なこと、できることなどを確認しながら…。本人にも…カウンセリングを継続的に言い不安解消。SSWが面談や他機関との連携を図り、生活面でのバックアップを行った」 【中7】「定期的に母親がカウンセリング…母親自身、焦らず、本人が外に行動を起こす日を待つことにした。母親と本人の関係も良好になった」 【中10】「SCのアドバイスに進路とかかわって登校刺激を促すのもよいとあり、実践してみて、成果がみられた」 【中5】「母親は、学校に対して話しぶり内容でもSSWに相談…担任とSSWが情報共有しながら…信頼関係を継続させられたことで、タイミングよく医療機関へ」 【中12】「不登校対策支援員が対応する別室登校を開始した。提言によりランチボックスを自分で運ばせることとし自立を図った」 【中16】「養護教諭や支援員が、寄り添いながら根気強く話しを聞き…」 【中17】「支援員には…コミュニケーションを増やす関わりにより…最近は抵抗なく自己開示できるようになっている」 【中22】「担任は、保護者との連絡を密にし、状況によってSCへの面談機会を作った」

＝考察＝

SC（スクールカウンセラー）、SSW（スクールソーシャルワーカー）、不登校対策相談員は無くてはならない存在となっている。SCによるカウンセリングは、悩みを抱える児童生徒のみならず保護者にとっても欠かすことができないもので、20回にも渡り長期に継続して効果をあげた事例もみられた。また、SCから学校に対して専門的な見地から適切なアドバイスがなされ、対応のよりどころともなっている。

SSWは、学校のみでの対応が難しい場合、福祉や医療等の関係機関と連携しながらより多面的な対応が可能となり、改善につながっている。

不登校対策相談員は、不登校生徒の見守りや支援を日常的に行っており、授業をはじめ他の業務も担当する教員の手が届かない部分まで支えとなっている。

また、養護教諭も大きな役割を果たしている。学校生活への不適応から心身の不調を訴え保健室に行くケースも多く、養護教諭の関わりや連携の取り方が重要なポイントであろう。

キ スモール・ステップ

特徴的な事例	
小学校	【小 22】「(学校に行かないと言う児童に) 一人で家にいることになる安全面から説得。『(明日は) 母親が休みだから自分も休み』との主張した際に肯定的に対応した…その後は休まず登校した」 【小 1】「母親の願いが児童には負担になっている…児童の思いや今できることを把握し学習を進める…」 【小 2】『「登校したい」という意欲がたまることを根気強く待ち、寄り添った支援を行った…」 【小 9】「落ち着いて登校できる時間に登校することを提案…にこやかな表情で登校する…学校で過ごす時間も長く…」
中学校	【中 3】「学習や生活の目標を設定し、適切な支援ができるようにスモール・ステップ表を作成」 【中 6】「教室前の廊下で授業を受ける練習をしながら、教室復帰に向け…他の生徒と一緒に学校生活を送れるようになった」 【中 13】「スモール・ステップの支援や指導を心掛け、家庭で取り組める学習課題を無理が生じないように配慮しながら提示し…」 【中 15】「生活のベースは6組（個別）、授業の時に5組（少人数）に行くだけでなく、帰りの会や掃除のときも5組に入って活動を行うようになった」 【中 7】「登校のリズムを崩さぬよう、夏休み中に5日間登校し、3時間程度担任と学習…生徒と廊下で言葉を交わす場面も」 【中 4】「タッチ登校を本人の意思として受け止める」 【中 17】「本人が参加しやすそうな活動の際には…友人を向かわせるなど、集団復帰の機運を高めてきた」 【中 20】「登校刺激を極力与えず、本人の意思で登校できるようにしている」

＝考察＝

改善に向けたスモールステップに関する事例も多く見られた。周囲から見るとほんの些細なことでも、本人にとってはとても大きい壁となっていることがある。子どもの目線に立って小さな歩みを支援していく姿勢が求められる。

小学校の事例では、「学校に行かない」と訴える児童に、「家に一人にいるのは危険だから」と説得して登校させた。その後、児童が「明日は母親の仕事が休みだから自分も休む」と話した。母の仕事が休みでも学校は休みではないのだから、何とか登校させたいところであるが、「一人でいることは危険だから」と登校の説得をしてきた経緯から、児童の主張を受け入れている。その後は、休むことはなく登校を続けているという事例である。もしも、「学校は休みではないから来なさい」と説得していたら、児童は「先生は都合によって言う事が変わる」と不信感を持ったことだろう。回り道にはなるが、子どもの目線に立った対応が、教師への信頼や安心感を与え、回復につながったものと思われる。

スモールステップ表を作成して自ら記入させている事例は、本人が無理なく納得して目標に向かっていくための参考となるとと思われる。選択肢を示し、より良い自己決定を促し、小さな一歩を保護者と共に支援し、認めていくことが大切だろう。また、学級で復帰を受け入れる機運をどのように高めるかも大切なポイントである。

ク 関係機関

特徴的な事例	
小学校	【小 5】「主治医のアドバイスを家庭と共有」 【小 11】「心の状態を色分けして尋ねるよう主治医のアドバイス」 【小 33】「市教委，未来部，児相，ＳＣ，フリースクールが学校と連携し役割を確認して支援を行っていく…」 【小 10】「警察と連携しながら通院につなげる」 【小 23】「専門的な関係機関，医療との連携で改善に」 【小 16】「市教委の個別面談で助言を得る」 【小 26】「病院で心理検査，特性について共有」 【小 36】「主治医より無理強いせず，選択肢で自己決定させること」 【小 35】「巡回相談での助言を生かした」 【小 41】「児童館，保健師，相談員を含め支援会議」
中学校	【中 6】「学校関係以外の機関（児相，市子ども青少年課）の協力を得ながらすすめたことで，家族の生活面や安全面での安心感を得ることができた」 【中 5】「保護者，ＳＳＷ，医療機関，学校との登校に向けたケース会議」 【中 11】「子ども未来部やフリースクールとの情報交換を密に行うことで，本人や母親とのコンタクトに関して配慮すべき点などを共有確認することができた」 【中 16】「市子ども家庭相談センター，県福祉総合相談センター，病院と連携しケースカンファレンスをもつ」 【中 22】「病院につなぎ，医療面でもケアできるようにした」 【中 20】「状況の改善のために病院を受診した」

＝考察＝

行政，福祉，医療，警察，フリースクール等，関係機関との連携を図っている事例が多く報告されている。

発達障がいや起立性調節障がい，ゲーム依存等により医療との関わりが必要となるケースが少なくない。適切なタイミングで医療につなぐためには，保護者との共通理解と信頼関係を深めておくことが欠かせない。また，病院が混んでいるため，受診までに時間を要することも念頭に置く必要がある。保護者の了解を得て学校から病院に出向き，学校の様子を伝えたり，主治医からアドバイスを得ることにより適切に対応することができている。病院で設定したケース会議も，病院と保護者と学校で方向性を確認する場として効果をあげている。

「心の状態を色分けして尋ねる」「無理強いせず，選択肢で自己決定させる」等の具体的な対応についてのアドバイスを得られた事例も参考としたい。

教育委員会や市子ども未来部等の行政機関との報告や相談，連携も行われている。市教委で実施している「不登校に関わる個別相談会」や「いきいきスクール事業」等の機会も活用し効果をあげた事例もみられている。

他機関との連携を図る場合，状況やこれまでの対応についての記録が必要となる。記録の残し方については確認しておく必要があるだろう。

ケ 進路指導

特徴的な事例	
小学校	【小 24】「母親から支援学校への進学を希望する話があった。特別支援コーディネーターと母親が面談を行い…対象とならないため、地元中学校への進学で落ち着いた。母親も納得している。進路への不安や疑問が生まれたタイミングに、誠実な対応をした」
中学校	【中 7】「3年生の4月に半年ぶりに相談室に登校した。進路について真剣に考えるようになり、期末テストに向けて目標を決めて学習に取り組んだ」 【中 10】「3年生となり、4月に本人と面談ができ進路について話すことができた…3年生に向けてどの生徒も進路を意識する。また、3月4月は前向きになる時期であるとのSCのアドバイス」 【中 18】「モリーオで高校見学をすることがあり…自分も通学できるかもしれないと感じた…そこから進路への意識が高まり…」 【中 16】「進路意識の醸成を目的に…高校見学を企画した…帰校後は、支援員と共に見学レポートを記入しながら…進路に対する意識を確認した」 【中 17】「今年度は進路意識の高揚を図る関わりを強めている」 【中 21】「夏休みには高校の体験入学にも参加し、進路の意識が見られた…学習についても志望校に進学するため、友だちとともに努力し、第一志望校に合格」 【中 22】「本人は進学への意欲があり、志望校のオープンスクールや体験授業、相談会などに参加し、高校に合格することができた」

＝考察＝

進路は子どもにとっても保護者にとっても関心事であるが、とりわけ不登校の場合は大きな不安材料ともなる。小学校の件数は少なかったが、保護者が進路に対する不安や疑問が生じたタイミングで学校が丁寧に対応したことで、納得を得た事例があった。保護者の安心感と地元の中学校に進学することへの納得感が得られたことは、改善に向けての大きなステップと言えるだろう。

中学校の事例の多くは、2年生の後半から3年生にかけてのものであり、卒業後の進路に向けて関心が高まるこの時期が、改善に向けた大きなチャンスとなっていることがわかる。進路について話し合う中で、自分自身や将来について考えさせたり、高校の体験入学や相談会に参加したりすることにより進路意識を高め改善につなげている。不登校生徒のために独自の高校見学会を実施した学校では、帰校後にその内容をまとめる等、一連の継続した取組としている点にも注目したい。

進路に対する不安を軽減し、将来に向けての前向きな気持ちを引き出すこと。進路先が決まった後は、進学後に向けて更に前進することが期待される。

コ 適応指導教室「ひろばモリーオ」

特徴的な事例	
小学校	【小1】「SCからの学校に復帰するまでには時間がかかりそうであるという助言をもとに、両親にモリーオに入級することを勧め…モリーオに入級し…気が合う中学生ができ…ほぼ毎日通級する…」 【小24】「学校とモリーオに数日通った」 【小26】「母親と相談し、ひろばモリーオへの通級を提案した。本人が関心を示したため通級を始めた。毎週金曜日には、母親に来校をお願いし、本人の通級の様子を聞くとともに、モリーオの担当者とも連携を図り、指導方針の共有を図った」
中学校	【中18】「6年生の後半からモリーオに通っている。中学校に進学しても通い…（教師が）モリーオに訪問し、本人の様子の変化などを定期的に情報交換。モリーオで実施した高校見学会で、自分も高校に通学できるかもしれないと感じ…中学校へ行ったほうがいいのかも…と心境の変化が…学校で学習することが増えた」 【中14】「本人との面談は、モリーオの相談室で行うことができた。その中で『中2の夏には学校に行けるようになりたい』『2週間後に次の面談をモリーオで行う』を目標にすることを確認…春休み中に計3回の面談を行い…4月以降の登校に至った」

＝考察＝

適応指導教室「ひろばモリーオ」（青山教室・仙北教室）は、学校に行けない子ども達を支援する施設である。①居場所づくり ②体力づくり ③自分づくり ④目的意識づくり ⑤自己有用感づくり ⑥仲間づくり ⑦学習意欲づくりを大切にし、癒し段階、安定期、復帰段階それぞれに応じた支援を行っている。また、高校見学や様々な行事も実施している。

報告された事例では、学校以外の居場所としてモリーオに通級することで、改善に向けたステップとしている。学校への登校は難しいけれども、他の施設なら通えるというケースでは有効な方策となっている。中学校の2つの事例では、教室復帰を果たしている。その際、学校とモリーオが情報共有や連携を図ることも大切である。モリーオを経て学校に戻った後でも、機会を捉えてその後の様子をモリーオに伝えたい。

また、市教育委員会学校教育課で実施している「いきいきスクール事業」では、不登校及び別室登校の児童生徒を対象にした体験学習を年間4回実施している。回復に向けたステップとして活用を積極的に検討頂きたい。

サ 自己有用感

特徴的な事例	
小学校	【小 22】「登校しぶりの根本原因が学習（特に算数）にあり，それに寄り添う支援によって乗り越えられそうな自分を認めることができたのではないかな。自己肯定感をもつことの重要性を感じた」 【小 4】「個別に学習し、『追い付いて学習している』実感を持たせている。学校での活動や学習について，日程予定と多様な選択肢を示し…大きな内容については考える時間を2～3日以上与えたり，実際にやってみたり映像を見たりさせることで見通しや『できそうだな』と自信を与える。また，途中で変更することも可能であることを示し安心感を持たせている」 【小 26】「医療機関からの情報をもとにして，専科の学習（教室外の理科等）に入ることができるようにすること，担任と親が情報共有の機会をより多くもつこと，本人の気持ちがのった日は声掛けをして学級に極力入ることを確認し，児童が所属感を感じ，自己有用感を高めるようにした。…友達との関わりの中で，自分の存在意義を感じていた」 【小 36】「自己性格分析でも自己肯定感や自尊感情等が低い結果が出ていることから，できないことを無理強いせずにエネルギーを貯めることが最優先課題で…」
中学校	【中 13】「自己決定の場면을意図的につくり，本人の頑張りを認めること。できた行動を褒めて価値づけること。本人の得意分野での学級への貢献を通して，自己存在感，居場所づくりを促すこと。継続的な指導が効果的」 【中 16】「資料の帳合などを依頼し，丁寧な仕事ぶりをほめた」 【中 17】「行事の目的を集団の成長に置き，事後ばかりでなく事中での振り返りを取り入れた。学級復帰と，文化祭に向かって結束しようとする学級の流れが，相乗効果を生んだ」 【中 22】「学校行事やその練習，部活動などへの参加を促し，他の生徒と時間を共有することで自己有用感を得ることができた」

＝考察＝

不登校となった児童生徒は自己有用感，自己肯定感，広くは自尊感情が低下していることが想定される。校内のみならず，家庭でも十分な愛情や承認を受けていないケースもみられ，自己肯定感，自己有用感を回復する手立ては改善に向けて大切である。事例にもあるように，本人の得意分野を発揮する場面を作り，それを認め評価することや，可能な範囲での作業等を通して間接的にであっても他者に貢献し，それを認めたり感謝を伝えたりすることで，自己有用感を高め，更なる交流のステップとすることも期待できる。また，すぐに成果には結びつくものではないが，自己決定の場면을意図的に作って，本人の意思や選択によって行動し，それを評価することを粘り強く蓄積していくことも大切であろう。

自己有用感とは，「大切に思われている」という存在感，「ためになっている」という貢献，「認めてくれる」という承認，「支えてくれる」という関係性の4つの要素からなる。1学期に当研究所で実施した「自己有用感アンケート」の結果も参考として頂きたい。

シ 特別支援教育

特徴的な事例	
小学校	【小 12】「生徒指導，特別支援教育，保健室と担当を分けない総合的視点からの児童理解とアプローチ。インクルーシブ教育システムの構築。『本当は自分も学習したい』という児童の願いをかなえるために，不登校及び教室不応児が，安心して学校生活を送ることができる学び場を整えた。不登校及び教室不応であった児童たちは，特別支援学級での学習を通して，自分の特性に関する自己理解を深め，よりよく生きていこうとする力を育んでいる」 【小 4】「1年生の6月に不登校となり…2年生は母親と一緒に職員玄関でのタッチ登校…3年生で，医療機関の診断と保護者の要望から，特別支援情緒学級に措置替えとなった。…別室で母親と共に簡単なドリル学習を30分…4年生では母親と生徒指導主事と1時間ほど学習…さらに，母親と離れて担当教師との行動や学習ができるようになった。5年生は，母親の送迎はあるが，担当教師と午前中学習に取り組むようになってきている」 【小 23】「授業を受けていないため，母親と本人と相談し6年生から特別支援学級に通級して国語と算数を学習…進んで発言する…意欲が感じられるようになった。」 【小 29】「特別支援教育コーディネーターからのアドバイスにより，朝，特別支援学級に登校してから学級に入ってみてはどうかと家庭に連絡した…困ったことがあると，特別支援学級に行くことで心を落ち着けてから学級に行くようになった。…現在は，特別支援教育コーディネーターが聞き取って，悩んでも解決できている…」 【小 21】「本校特別支援学級に在籍し，安心できる環境及び教育課程を提供し，自尊感情の向上を図った。一番信頼を寄せる担任の指導を中心としながら，管理職や交流学級担任との関わりを持つ中で社会性を育て，多くの教職員から認められる機会を増やした。教科学習では，本児の実態に合わせて指導することで「できる」ことを増やし意欲をもって取り組めるように努めた…自尊感情を高める活動を行った」 【小 39】「すぐには教室へ入ることができなかったため，特別支援教室の中に心を落ち着ける場所を設定した…些細な騒音や放送の音質，音量などにも恐怖感を示したので，イヤーマフを装着させた。目に見えて落ち着きを保つように…」
中学校	【中 2】「(小学校での就学指導により) 本校の特別支援学級への進学となったが…欠席が続いた。2年に進級して初回登校は5月だった。始めは生徒下校後の教室で1時間程度の学習を行っていたが，曜日を決めて週1～2回の登校を続け，3学期には2時間近く学校で活動するようになった。3年生では通常の登校スタイルに近づけることを目標に10時から14時の学習に切り替えほぼ毎日登校している。相談室での活動を足掛かりとしながら，パソコン室や体育館での授業にも参加することができるようになっていく」

＝考察＝

特別支援学級に関わる事例は，小学校に多く見られた。学年を追って学習内容が難しくなり，不応という形で障がい者が顕在化したケースでは，特別支援学級に在籍を変更した上で個に応じた指導をすすめることにより改善が図られている。また，特別支援学級への措置替えはせずに通級という形で学習の支援をしたり，一時的に落ち着く場とすることで改善が図られた事例もみられるなど，柔軟な活用が図られている。生徒指導，特別支援教育，保健室と担当を分けずにインクルーシブ教育の視点に立つ取り組みは大きな示唆となるだろう。小学校の就学指導により，中学校で特別支援学級に措置替えして入学し，相談室を足掛かりとして授業に参加できるまでになった事例は，小中連携の面からも参考としたい取組である。

ス 未然防止・早期発見

特徴的な事例	
小学校	【小 18】「毎月初め『心のアンケート』『生活のふりかえり』の実施。気になる回答の児童には、すぐに個別に聞き取りをし、必要に応じて素早く対応…対応した結果をアンケート用紙に記入し、生徒指導主事に提出（報告）する」 【小 42】「児童会による『いじめゼロ宣言』に向けての取り組み…児童会執行委員会から、全校児童が安心して生活できる学校を目指していく旨の呼びかけ…学級の宣言文を作成…児童朝会で発表…ふり返り…代表委員会で確認…学校全体の雰囲気を作る…」 【小 25】「不安を抱える児童と担任が結びつきを強め、不安を解消して…わかる授業になるよう体制を組み…母親には連絡帳で細目に様子を知らせ、不安解消に努めた」 【小 38】「ソーシャルスキルトレーニングを採り入れ…Q U検査の結果等も活用した」
中学校	【中 2】「生徒のサインを見逃さない手立てとして、日頃の生徒観察とともに、週1回の情報交換会と月1回の生活調査アンケートを実施している。」 【中 14】「これまで週1回の支援会議を開催していたが、各学年に多くの案件があり具体的な支援について議論を深めることが難しい状況であった。そこで今年度より、支援会議に加えてより具体的な役割分担や関係機関との連携などについて話ができる場（教育相談係会）をつくり、支援の充実と負担軽減を図っている。」

＝考察＝

今回は各小中学校に、不登校の効果的な取組又は未然防止・早期発見への取組から一事例を選んで報告を求めたことから、対象となる個別の事案がない学校を中心に未然防止・早期発見に向けた取組が数例報告されているが、各校で様々な取組が行われている。

毎月アンケートを実施して、児童生徒の悩みや変化をいち早くキャッチし、組織的な対応をしている事例、「いじめゼロ宣言」の児童会活動を通して誰もが安心できる学校づくりに向け取り組んだ事例、ソーシャルスキルトレーニングやQ Uを活用した事例、連絡帳を活用して保護者とときめ細かく連携した事例等が報告された。

友達との付き合い方や、適度な距離の取り方を学ぶ機会が減っていることが指摘されている昨今、ソーシャルスキルトレーニング等により人と人との関わり方を身に付けることにより、対人面を主な原因とする不登校の防止にもつながるであろう。

IV まとめ

＜まとめ＞

○ 本研究は大きく次のようにまとめることができる。

- (1) 市内の小学校 42 校，中学校 22 校から不登校への効果的な取組一事例の提出を受け，各事例の一連の取組みを分類整理することを通して，不登校対応の実践的な手掛かりを得ることができた。
- (2) 各校の事例からは，学校が不登校の改善を期して多くの努力を重ね，困難な状況にあらゆる方策を講じながら対応していることがわかった。中でも，学級担任が子どもや保護者の心情や状況に寄り添い，誠実にきめ細かく対応することにより，信頼を得ながら対応し，改善に向かっている事例が多くみられた。
- (3) 学校では，支援委員会等を開催し，情報共有を図り，対応方針を確認して組織的な対応を行い，効果をあげた事例が多く報告されている。
- (4) 効果的な取組事例の多くで，保護者との連携を図り，信頼を深めていた。保護者の不安や疑問を受け止め，連携と協力関係を築くことが重要であり，各事例から多くの実践上の示唆を得ることができた。
- (5) 不登校（傾向）の児童生徒が登校するためには，居場所が必要である。空間としての居場所，心の居場所の両面を整えることが大切である。学校の実情に即して様々な工夫がなされていた。保健室や特別支援学級の活用で効果をあげている事例もみられた。
- (6) 子どもは学ぼうとする存在である。学びを通じて心のエネルギーを回復し，改善に向かっている事例もみられた。学校では，教科担任による授業や，興味関心に応じた学習を行い回復に向かった事例もあった。
- (7) 各校に配置されている SC，SSW，不登校対策相談員は，それぞれの専門性を発揮して不登校対策に貢献しており，なくてはならない存在となっている。また，保健室での養護教諭の関わりも大きな力となっている。
- (8) 子どもの目線に立ち，スモール・ステップでより良い自己決定を促し，小さな一歩を支援していくことが改善に向けてのポイントとなっている。
- (9) 行政，福祉，医療，警察，フリースクール等の関係機関と連携を図り効果をあげた事例が多くみられた。適応指導教室「ひろばモリーオ」と連携した事例も参考としたい。
- (10) 中学 2 年生の後半から 3 年生で進路への関心が高まることから，オープンスクールへの参加等を活用しながら進路意識を高めることで改善する事例がみられる。
- (11) 自己有用感，自己肯定感，自尊感情を高める支援を継続することが大切である。
- (12) 特に小学校において特別支援教育との連携を図った事例がみられた。インクルーシブ教育の視点から対応している事例も参考としたい。
- (13) 未然防止，早期発見に向けた取組については，全ての学校で行われているが，今回は効果的な取組について，一事例の提出を求めたことから，数校の報告となっている。アンケートを活用したり，児童会活動を展開したり，ソーシャルスキルトレーニングに取り組んだ事例が報告されている。

<おわりに>

市内の小中学校 64 校から、効果のあった不登校対策一事例を報告頂きました。各校とも様々な事例の中から、これはというものを選んでまとめていただいたものと思います。そのひとつひとつの事例を子どもの姿や先生方の対応の様子を想像しながら丁寧に読み取り、特徴毎に分類してみました。担任の先生の家庭訪問一つとっても、そこには様々な経緯があり、改善を願いながらの準備もあったことでしょう。不登校は、一朝一夕に解決に向かう訳ではありません。児童生徒と保護者は様々な葛藤を繰り返しながら、一日千秋の思いで過ごしているのではないのでしょうか。そして、その対応に悩んでいる先生も少なくないことと思います。本研究に寄せられた事例には、市内各校の努力と叡智のエキスが込められています。現場に立つ先生方にとって何かしらの手がかりとなることを願っています。

最後に、調査の実施にあたって御協力いただいた、各校の校長先生をはじめとする先生方、関係の皆様に深く感謝申し上げます。

<参考文献>

- 『不登校といじめ問題等の解決のために 第5集』独立行政法人教員研修センター
『不登校への標準対応～どこの学校でもできる上手な不登校対応』
小澤美代子監修 田邊昭雄編著
『不登校の子どもに何が必要か』 増田健太郎 編著

【 研究担当者 】

盛岡市教育研究所

専門研究員 岩 崎 雅 司